

養気軒

ようきけん

『さわやかな笑顔と思いやりの心で、安心、安全な満足される医療をめざします』
そのために、患者さんは言うまでもなく全職員ひとり一人を大切にします。

099 | <歯科ユニット>

●ようきけんとは「病む人の病のみならず心をも癒すことの出来るところ」という意味です。



左から、尾崎俊隆 尾崎歯科院長・藤岡 長崎川棚医療センター 院長・中尾華奈子 歯科衛生士

長期入院されている神経難病患者さんの 口腔ケア、歯科治療について

この度、歯科ユニット(歯科用椅子と治療装置が一体となった歯科専用設備)を更新しました。このユニットは、患者さんの口腔ケア、歯科治療に使用する設備です。

当院では、尾崎歯科医院の尾崎俊隆院長に診療応援いただき、神経難病病棟に入院中の患者さんの『口腔ケア・歯科治療』を行っています。

尾崎院長のお力添えにより、患者さんの口腔内および歯科的問題が解決され、患者さんのQOLが大変向上しています。

尾崎歯科医院診療がお忙しい中、診療応援をいただき、尾崎院長には大変感謝しております。

今後ともお力添えのほど、何卒よろしくお願い申し上げます。☞

(院長 藤岡ひかる)



園芸ボランティア『園芸やろう会』のご紹介

主任児童指導員 **浦川 萌**

5月8日に新型コロナウイルス感染症の分類が変わり、街中においても様々な制限が少しずつ緩和され、コロナ禍前に戻りつつあります。

今回、2年ぶりに川棚町の園芸ボランティア『園芸やろう会』の皆様によって、カフェテリア正面の花壇に250本の花苗が植えられました。『園芸やろう会』の方々は、年2回（6月、11月）の活動で当院を支えてくださる貴重なボランティア団体のひとつです。

梅雨の時期でありながらもボランティア当日は晴天に恵まれ、あっという間に華やかな花壇へと蘇りました。

植えられた花々は、見る人の心を癒し、安らぎを与えてくれます。

『園芸やろう会』の皆様、酷暑にもかかわらず花壇を整備していただき、誠にありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。



誕生日レクリエーションについて

保育士 **柊田 千晴**

療養介護病棟である8病棟では、普段からベッド上で過ごすことが多い方を対象に、誕生日を迎えられた方へのレクリエーションを行っています。

誕生日を迎えられた方のベッドサイド周辺を装飾し季節感や外の様子などを感じていただき、歌のプレゼントや生年月日の時事語らいなどでお祝いしています。

また、プラネタリウムや好みの映像や動画を鑑賞できるようにし、日頃と違った環境の中で過ごしていただけるように工夫しています。

晴天時には、院内散歩、外気浴などを行い、居室から離れて気分転換ができるようにしています。

現在、面会制限も徐々に緩和されてきたことから、ご家族にもご案内し、面会と合わせ一緒にご参加いただいています。参加された方はゆったりとした時間の中でリラックスした様子で過ごされています。

今後もコロナ感染症の状況を見ながら、皆さんに喜んでいただけるイベント等の提供に努めたいと思います。



BLS研修について

医療安全管理係長 南 聡美

BLSとは、『Basic Life Support』の略称で、心肺又は呼吸停止時に対する一次救命処置のことです。

少し詳しくお話しすると、①周囲の安全確認、②病院内では専用番号に連絡（病院外では119番通報とAEDの準備）、③呼吸しているか確認、④呼吸していなければ心臓マッサージを開始、という流れになります。

BLSは専用の器具や医薬品を使う必要がないため、正しい知識で適切に実施することが「一次救命処置成功」の鍵となります。



Basic
Life
Support

当院では、BLS研修を毎年全職員対象に実施しており、病院内に限らず、病院外で遭遇した際にも適切に対処できるよう指導を行っています。

これからも安全な医療提供のために研修の企画や指導を行っていきます。

院内勉強会を行いました

医療機器管理室長 津田 真実

医療機器管理室の業務のひとつとして、医療機器の取扱いに関するスタッフへの教育・指導があります。

その一環として、除細動器・AEDの勉強会を開催しました。

『除細動器』は心停止に対して電気ショックを加え、心拍を正常なリズムに戻す機器です。心房細動等への治療機器としても使用されます。機能が多く、扱いがやや複雑な機器です。

AEDは、駅や商業施設などでよく見かけるようになった機器で、除細動器と同じく電気ショックを行うものです。その場で心電図波形を確認できなくても機器



が自動で波形解析を行い、電気ショックが必要かどうかの判断をしてくれるものです。

当院では、病棟にAED、手術室や外来・ICUなどに『除細動器』を設置しています。勉強会には多くのスタッフが参加しました。機器の使用方法や操作の確認等を行い、皆で情報を共有し合え、非常に有意義なものとなりました。

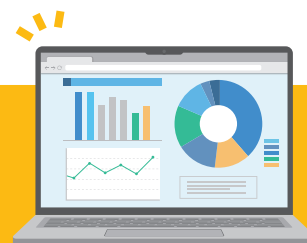
「病院情報の公表」について

医療情報管理係長 松永 央子

当院では、「病院情報の公表」ということで、病院指標をホームページにて公開しております。病院指標とは、厚生労働省が定める「病院情報の公表の集計条件」に基づき、医療の質を数値で示し客観的に評価するものです。

項目は7項目あり、医療の透明化および質の向上を目的としてこの指標を公開しています。全ての指標に、コメントや当院の特色を記載しております。

令和4年度の集計は10月に公開予定としておりますので、是非ご覧ください。



令和3年度 長崎川棚医療センター 病院指標

医療法における病院等の広告規制について（厚生労働省）

1. 年齢階級別退院患者数
2. 診断群分類別患者数等（診療科別患者数上位5位まで）
3. 初発の5大癌のUICC病期分類並びに再発患者数
4. 成人市中肺炎の重症度別患者数等
5. 脳梗塞の患者数等
6. 診療科別手術手術別患者数等（診療科別患者数上位5位まで）
7. その他（D I C、敗血症、その他の菌血症および手術・術後の合併症の発生率）

年齢階級別退院患者数

ファイルダウンロード

年齢区分	0～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	70～	80～	90～
患者数	-	26	43	40	111	133	337	534	651	298

2021年4月1日から2022年3月31日までの退院患者数を、入院時の年齢（10歳刻み）で集計しています。地域医療支援病院である当院は東彼杵地区唯一の急性期クアミックス型機能を持つ病院（急性期・慢性期・地域包括ケア病院）であり、地域医療連携を固めながらかかりつけ医から紹介を受け専門医療を提供し、治療が終了したら速やかに地域に送付しています。2021年度の退院患者総数は2,174人で、昨年度同様の歳以上を占めており、地域の高齢化が反映される結果となりました。また、2020年度より総合診療内科医師が、2021年度より外科医師が、2022年度より整形外科医師が増員となり、幅広い分野の診療に対応すると共に、救急医療の強化に取り組んでいます。

※患者数が10未満の場合は、「-」を表示しています。

診断群分類別患者数等（診療科別患者数上位5位まで）

ファイルダウンロード

診療科紹介 (脳神経外科)

脳神経外科部長 戸田 啓介

脳卒中は脳の血管に起こる病気です。脳卒中は寿命を縮める他に、後遺症によって要介護状態をもたらす可能性が高く、寝たきりの原因の第1位疾患と言われています。

元気な状態で日常生活を制限なく過ごすことができる「健康寿命」を延ばしていくうえでも、脳卒中の予防が大切になります。

長崎川棚医療センター脳神経外科では、脳卒中をもたらす危険因子を検索する取り組みを行ってきました。「脳ドック」に加えて、昨年秋からは「脳血管外来」を開設し、脳卒中の危険因子を把握し予防に繋げる診療



を行っています。また10月には当院の医師による脳卒中や生活習慣病についての公開講座を行う予定です。

現在の生活習慣をもう一度見直し、健康寿命を延ばすことを一緒に考えていきましょう。

部署紹介 (地域医療連携室)

地域医療連携係長 富永 文子

地域医療連携室は、医療相談支援センターに設置されています。患者さんを中心として当院と地域をつなぐ役割を担っており、医療社会事業専門員(MSW)、看護師、医療事務職員が配置され、院内外の多くの部門と連携し業務にあたっています。

主な業務として、ひとつめは、地域のクリニックや診療所などのかかりつけとする患者さんの検査や診療の予約を受け付けています。当院での検査・治療が終了された患者さんについては、ご紹介いただいた医療機関へ検査結果や治療経過を情報提供し、継続した診療ができるよう連携を図っています。

また、急性期病院からの継続治療やリハビリ目的での転院に関する調整も行っています。

ふたつめは、入院中の患者さんの退院支援を行っています。退院後の生活について患者さんと

そのご家族のご希望に添えるよう共に考え、外部の担当者や施設、介護サービス機関と連携し自宅退院や施設入所、転院等の調整を行っています。また、介護保険や福祉制度、介護・療養に関する相談への対応も行っています。

これからも、患者さん・ご家族の思いに寄り添い、地域医療機関のご要望に迅速に対応できるよう尽力してまいります。



編集後記

栄養管理室長 金子 友美

先日、国連は「地球は沸騰化」に入ったと警告を發しました。日本国内も、連日の災害級猛暑で一部の専門家は、この酷暑は2025年まで毎年続くと警告しているというネット記事を目にしました。

私が子供の頃(昭和50年後半～60年代)、「クーラーはもったいない、扇風機で大丈夫」父親がいつも言っていたこの言葉が、40年近く経った今では通用しない時代になってしまいました。

管理栄養士目線になると、衛生管理を徹底し患者さ

んに安心して食べていただける病院食の提供を心掛け、日々スタッフと業務に取り組んでいるところです。しかし、火を使う厨房はこの時期はエアコンの温度を最低温度に設定しても高温多湿が続いています。体調管理のためにしっかり食べて飲んでゆっくり休むよう、スタッフとのミーティングでも周知するようにしています。

この広報誌が発行される9月は少しでも涼しくなっていることを願うばかりです。